名詞述語文「～は～です」の意味と機能に関する一考察

市川保子

1. はじめに

外国人に対する日本語教育の教科書では，第1課は名詞述語文「～は～です」から始まることが多い。「これは本です」「こちらは田中さんです」などである。そして，これは今でこそ笑い話として引き合いに出されることであるが，教師が鉛筆を片手に持ち，「これは鉛筆です」を一生懸命教えようとしたとき，学生は，「先生はどうして目の前にある鉛筆を「これは鉛筆だ」と重ねて強調するのだろう。この鉛筆には何か特別のしかけがあるのかもしれない」と不思議がったという。

これは，教師が「～は～です」という文の形を教えようとしたのに対し，学生は，その文のもつ実際的な意味をとらえようとしたためにおこったものである。「これは鉛筆です」の例に限らず，形の指導を優先させようとする語学教師のしばしばおかす誤りとも言えよう。

現在，日本語教育では，オーディオリンガル法に代表される，形と正確さを重視した教育から，コミュニケーションを重視する教育へと移りつつある。そこでは文の実際的な使われ方に焦点が当てられ，話し手の表現意図や文の持つ伝達機能が指導の重要な部分を占める。

では，「～は～です」は実際の会話の中ではどのように使われているのか。

本稿は，名詞述語文「～は～です」が実際のコミュニケーションの場において，どのような伝達機能をになって使われているかの考察を目的とする。ドラマ・対談・生の会話・小説の会話部分などの会話資料を観察し，話しことばにおける「～は～です」文の使われ方を考える。

名詞述語文を代表する「～は～です」は，普通「聞き手の目の前にあるも

の，聞き手の知識の中にある特定のもの，そのことについて聞き手が何か情報を得たがっているものについて，その解説として使われる性質のものである」[(1)]とされている。話し手が聞き手に情報を与える文であるから，聞き手がそれが鉛筆であることを知っている場合には，「これは鉛筆です」は不適切ということになる。しかし，聞き手が当然知っている，また，聞き手にとってそれほどの情報のないときでも「～は～です」が使われることがある。

（1） しょせんあたしは三流品よ。（ちょっといい夫婦）
（2） そりゃ私はお前の親だから，私さえ踏台になっていればお前がよくなる，とでも言うんならどんな目も辛抱しますよ。（伸子）
（3） わたしはあなたの妻よ，それを知る権利はあるはずよ。
（4） わざわざあなたまでお呼びしたのは，ほかのことじゃありませんが……，（伸）
（5） それはそうですね。（録音器）

（1）～（5）の「～は～です」は聞き手にそれほどの情報はもたらさない。むしろ話し手の気持ち（1）や，後ろに続く文に対する理由づけ（2）（3），前置き（4），あいづち（5）などとして使われている。

「こちらは田中さんです」などに代表される情報伝達の文と（1）～（5）の文は，同じ「～は～です」でありながら，なぜこのように異なった働き・機能を持つのであろうか。

本稿では，機能的な関係が，それぞれの文の主語と述語の意味的な関係の違いから出てきていると考える立場をとる。「これは鉛筆だ」は「これ」=「鉛筆」とする同定の文であるが，（1）の「三流品だ」は「あたし」の持つ一つの特質（性格）を述べている。（2）（3）の「お前の親」「あなたの妻」も「私」を同定するというよりは類別している。また，（5）「それはそうだ」は「そう」が状態・性質（「それは正しい，もっともだ」などの）を表していると言える。

意味的関係もそうであるが，特に機能的関係の把握は，機能ということ自身が大きな問題であるので，取り組みがむずかしい。本稿の考察も「～は～です」文の機能のほんの一部を取り上げたものにすぎず，機能というより，使われ方の考察とでもいうべきものである。実際的な使われ方を考察することで，「～は～です」の言語研究，及び日本語教育への応用につなげていきたいと思う。

本稿では名詞述語文の範囲を高橋太郎(1984)[2]に従い，「主語と述語の対立のなかで，述語が名詞でつくられる文」とする。名詞述語文には「～が～です」も含まれるが，「～は～です」を中心に（必要に応じて「～も～です」も）取り上げる。また，主語が省略されていても名詞述語文であるが，本稿では主語のある文だけを観察の対象とする。

2. 名詞述語文の意味的関係

高橋(1984)は名詞述語文の主語と述語の意味的な関係を大きく4つに分類している。

A　述語が主語の動作をさししめているもの……「動作づけ」
B　述語が主語の状態をさししめしているもの……「状態づけ」
C　述語が主語の質的な属性をさししめしているもの…「性格づけ」
D　主語と述語が同一の物事をさししめしているもの…「同一づけ」

Aの「動作づけ」とは(6)～(8)のように名詞述語が動作を表す場合をさす。

(6)　あっしゃもうこれきり断然絶交だ。[3]
(7)　われわれもいよいよあす出発だ。
(8)　佃さんは，どこかへ御旅行ですか。（伸）

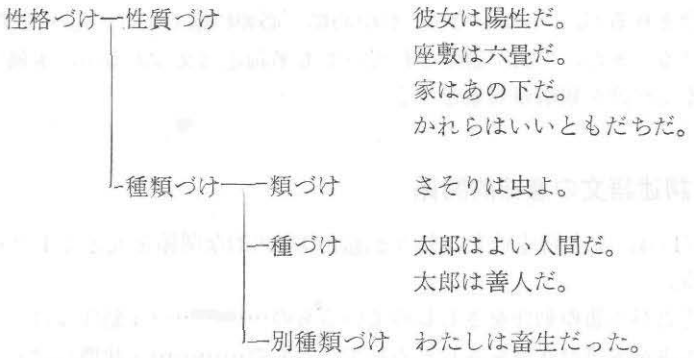
「動作づけ」は，「名詞本来の任務ではない」と高橋が言っているように，「～は～です」文の資料集めのときも数が非常に少なかった。

Bの「状態づけ」は，あるものごとが一定時間において，どんなありさまにあるかを示す関係である。一定時間における動作のようす，性格のありさま，変化過程の中の位置などが含まれる。

(9)　こちらはひどい吹雪ですよ。
(10)　俺はたくさんだ。
(11)　水谷君も文科で，今年大学に入るんだ。

Cの「性格づけ」は「おおきい」とか「うまい」とかの内包による「性質づ

け」と，「いも」「おやつ」などの外延による「種類づけ」の二つに分けられる。



「種類づけ」は更に「類づけ」と「種づけ」，「別種類づけ」に三分される。「類づけ」は上位概念（上の例では「さそりに対する虫」）で性格づけるものであり，「種づけ」はなんらかの内包で制限された上位概念（「太郎に対する人間」）で性格づけるものである。「種づけ」の場合，内包と上位概念を別の単語で表すもの（「よい人間」）と，一単語で表すもの（「善人」）がある。

Dの「同一づけ」と呼ばれるものは，主語と述語が同一のものをさし，述語でそれを結び付ける関係である。高橋は現象形態が違うもの，同じもの，ひっくり返し文，内容とわくぐみなどに分けている。「同一づけ」では主語と述語は入れかえることができる。

(12)　これはきのうのきっぷだ。（現象形態がちがう）
(13)　こちらは高橋さん。（一つの現象形態にあるもの）
(14)　パンをくったのはおれだ。（ひっくり返し文）
(15)　～というのがそのはなしだ。（内容とわくぐみ）
(16)　電灯を消すのが私の仕事だ。（できごとや動作とその概念）
(17)　シメキとは情婦の意味だ。（意味するものと意味されるもの）

高橋も言っているようにＡＢＣＤは，ＡとＢ，ＢとＣ，ＣとＤそれぞれに移行する可能性を持っており，筆者が資料を分類するときもどちらに入れていいか迷うものも多かった。次の(18)では「大賛成」を「大いに賛成する」と「動作づけ」にとらえることもできるし，「大いなる賛成の状態にある」として「状

態づけ」と考えることもできる。

(18)　僕は寺なんかがよく保存されることは大賛成だが，……

「状態づけ」はある一時期のものごとのありさまを示し，「性格づけ」は恒常的なものごとのあり方を示す。しかし，(19)は現在の一時期の状態とも言えるし，本質的なものとしてもとらえることができる。

(19)　かれらはいい友達だ。

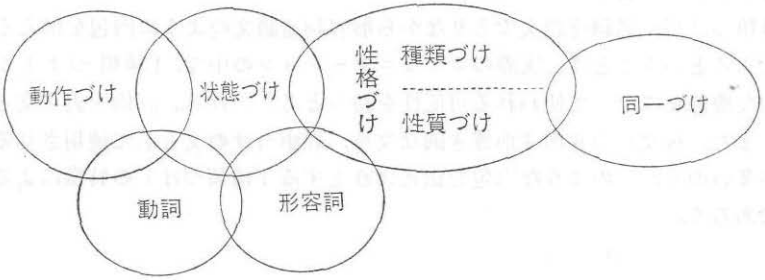
高橋は(20) a を「状態づけ」，b を「性格づけ」に分類している。

(20) a　そのとき，おれは中学生だった。
　　 b　そのときのおれは中学生だった。

「性格づけ」と「同一づけ」も連続性を持つ。(21)は「となりは米屋ですか，酒屋ですか」の答えとしては「同一づけ」となり，「米屋はどこですか」の答えとしては「性格づけ」となる。

(21)　米屋はとなりです。

このように4つの意味的な分類は連続性を持ち，重なり合っている。高橋の分類を，形容詞，動詞との重なりを合わせて，大まかに図式化してみると次のようになろう。(4)



3.　機能とのかかわり

高橋の分類したＡＢＣＤの意味的な関係は，話し手の表現意図や伝達機能とどのように関わっているのであろうか。ＡＢＣＤそれぞれの意味的な関係が，特徴的な伝達機能を形作っているであろうか。

まず，「性格づけ」の中の「種類づけ」と機能の関係を見てみよう。

3.1 「種類づけ」の機能

「種類づけ」は上位概念のみで（類づけ），またはなんらかの内包で制限された上位概念で（種づけ）性格づけるものである。高橋は，種づけの場合，(22)のように述語にわかりきった上位概念の語をもってきて，その特徴的な内包を描き出すものの多いこと，

(22)　私は女です。私にはあなたのお役にたつことよりほかにのぞみはないのです。

また種づけでは，その上位概念をあらわす単語が，その文の中で新しい情報をもたらさない(23)のようなものが多く，

(23)　このへんがいちばん閑静で見はらしのよい場所であろう。

これらの文では述語は結局その内包を伝えていることを指摘し，「種類づけというものは，いつもその内包がおもてににじみでるかたちで使用されていることがわかる」と述べている。

種類づけが，名詞述語文でありながら形容詞述語文のように内包を伝えるものであるということは，実際のコミュニケーションの中で，「種類づけ」が特徴的な機能をになって使われる可能性を持つと考えられる。評価を表す文として，また，後文を引き出す前置き的な文や，理由づけの文として使用されることが多いのも，このような内包を伝えようとする「種類づけ」の特徴によるものであろう。

3.1.1 「種類づけ」と評価づけ

「種類づけ」が実際的には内包を伝えるものであるなら，形容詞文と似た性質を持つことになる。形容詞文は，動的事象の客観的な描写とは異なり，「存在が認識された物・人・事態について，話し手が何らかの特徴づけ，種類わけ，評価などを下す表現[5]」である。

「種類づけ」の文は話し手の使い方によって非常に主観的な評価をあらわす場合も多い。評価はプラス評価，マイナス評価のいずれもあらわれる。

(24)　じゃ，ほんとに去年もいい年。(徹子)
(25)　それはまた別問題です。(録)
(26)　小倉さんという人は怖い人だったそうですね。(ち)
(27)　こいつは典型的な悪質運転手ですよ。(ち)
(28)　何といってもお栄さんはやはり水商売の人だね。(点と線)

1で出た(1)も「種類づけ」に属し，マイナス評価を表すと考えられる。

「種類づけ」が否定の形をとると，単に上位概念に含まれることを否定しているのでなく，内包を否定することになる。内包を否定することによって，そのこととは逆であるということを強く主張している。

(29)　そういうものは簡単に決められるものじゃない。(3年たって，恋)
(30)　やめてくれよ。僕の本は漫画や小説じゃないんだよ。だれが読んでもおもしろいってわけにはいかないんだ。(3)

(29)は「簡単に決められるもの」ではないと否定することで，「そういうものはもっと慎重に考えるものだ」ということを言い，(30)は後で言いかえているように「漫画や小説」ではないと否定することで，「だれが読んでもおもしろいものじゃない，もっとかたい本なのだ」ということを伝えている。

3.1.2 「種類づけ」と前置き文「～が／けれど」

特に対談などで見られるもので，「種類づけ」の文が前文として，後文を引き出すための前置き的な役割を果たしている。前文には情報的な価値は少なく，注釈としての役割がほとんどで，「が／けれど」などの接続助詞を伴ってあらわれる。談話機能上の役割として，ことがらを発話時点で旧情報化して受

け手に前もって知らせておくという機能を持つ。

(31)　これは前にもお話したことですが，……(録)

(32)　これも面白い話なんだけど，経済的に学校がやっていけなかった。なぜやっていけなかったかというと誰も月謝を払わなかった。(徹)

(33)　いずみたくさんは独学に近く音楽の勉強をなさった方でいらっしゃいますけど，しいて先生と言えば芥川やすしさんになっちゃうんですって。(徹)

(34)　こうやって拝見してると，あれは富山の話でしたけれども，やはりちゃんと演技をしてらっしゃるんだと思いますね。(徹)

(35)　これは冗談半分の言い方なんですが，あなたのね，かってあったような神経質をね，弟がいってに引き受けてくれたくらいに思ってね，(教育相談)

(36)　ずいぶんあなたはあれね，まるで子供とおっしゃるところと，そういうさっぱりしたところもおありなのね。(徹)

前出の1の(4)もこれにあてはまるだろう。

前置き文は主語に「これ」を代表とする指示語や，発話の送り手・受け手である「わたし／あなた」が来ることが多い。述語に来る上位概念の語も「こと／話／方／立場／言い方」など形式化されたものが多く，むしろその語の前に来る内包を伝えようとしている。その意味では(31)～(33)は(31)'～(33)'と同じと言える。

(31)'　これは前にもお話ししましたが，……

(32)'　これも面白いんだけど，……

(33)'　いずみたくさんは独学に近く音楽の勉強をなさいましたけど，……

(31)'～(33)'に見られるように，動詞文や形容詞文で叙述的に表すよりは連体修飾の形をとって表したほうがより客観的に話が伝えられる。客観的な話題として受け手の前に前提として提出できる。「お話したこと」「面白い話」と名詞化することによって，前置き文を主題として提示する役割を果たしていると言える。

3.1.3 「種類づけ」と理由づけ「～から」

「種類づけ」を用いて理由を述べ，後文に続ける使われ方も話しことばによく見られる。前文に来る理由づけは，その理由のために後文が引き起こされるほどの理由でなく，むしろ後文を述べるための前置き的な文として使われている。前節の「前置き文」と似ているが，やはり話し手の心理としては理由づけの意味を持っていること，接続助詞として「から」があらわれやすいことが特徴である。

(37)　僕はたまたま医者ですからね，特に現実優先に考えますから，……(教)

(38)　だからそういうことはさ，非常に事務的な話だからね，保護者がね，要するにあなたの親御さんが学校の担任の先生と話し合って……(教)

(39)　そう，だから僕はまだなんか，やんちゃ坊主でしたからね，ずいぶん失礼なこと言ったりしたんじゃないかなって，今思うんですけどね。(徹)

(40)　私は野蛮人だから，生活だって何だって，自分の手で欲しいのを掴んで見なければ承知しないたちなのよ。(伸)

(41)　私はいい看護婦だから安心してまかせていらっしゃい。(伸)

1の(2)もこれに属すると考えられよう。

3.2 「同一づけ」の機能

「同一づけ」は「主語と述語が同一のものをさし，述語でそれを結び付けている関係」であり，主語と述語を入れかえることができるものである。

(42)　部長はわたしだ。(女が職場を去るとき)

(43)　それはつげだよ。(録)

(44)　これは色留です。(録)

(45)　fさんを初めて酔わせたのはわたくしですよ。(録)

(46)　次は東久留米でございます。(録)

(47)　あれはねー，ぼくの人形だよ。(録)

(42)～(47)に共通してみられるのは，話し手の聞き手に対する何らかの主張，または情報の提供である。「種類づけ」が話し手の心理的な評価を表すの

と対照的である。

次の(48)は「～は～です」を言うことによって，聞き手の間違いを指摘している。

(48)　ホーク2本出してちょうだい。それはスプーンよ。ホーク出してちょうだいって言ったでしょ？（録）

「同一づけ」には上の(45)のようなひっくり返し文も多くみられる。指定の文「わたくしがfさんを初めて酔わせたのですよ」をひっくり返したものである。

3.2.1 「同一づけ」と一般化

高橋は「述語になるという機能がモノを性格にかえようとする力をはたらかせている可能性がある」と述べ，「同一づけ」において，主語と述語は，「モノとその属性という関係ではない。乱暴ないいかたがゆるされるとすれば，現象と本質の関係だといえるかもしれない」と言っている。前出の(42)～(47)を見ると，ひっくり返し文である(42)(45)を除いて，より具体的なもの「これ，それ，次，あれ」が主語になり，より一般的でより抽象的な「つげ，色留，東久留米，ぼくの人形」が述語になっているのがわかる。従って「同一づけ」は，特殊な，具体的なものを取り上げ，それを一般化させる機能，言いかえればそれについて説明する文と言えよう。

また「同一づけ」には主語と述語が同じ名詞をとる文がある。

(49)　夫婦は夫婦なのよ……（伸）

(50)　いなかはいなかですな。（録）

(51)　伯父さんは伯父さん，要さんは要さんよ。（暗夜行路）

高橋は次の例を出し，「つぎのような文では，主語と述語が同じ単語で作られているが，述語のほうに評価的なニュアンスがついているような気がする」と言っている。

(52)　サルはサルである。サルは人間よりも，毛が三本たらぬ存在である。

(53)　そりゃ，規則は規則ですもの。

(49)では「自分達のような夫婦でも世間で言うところの夫婦なんだ」と主語の「夫婦」は具体的なもの，述語の「夫婦」は抽象的なものをさしている。(50)ではその土地が田舎であることについて，やはり世間一般の田舎だと言い，(51)では述語の「伯父さん」「要さん」は総体としての「伯父さん」「要さん」としてとらえられている。

3.2.2 「同一づけ」と連用中止

ここでは「～は～です」が，文の中で「～で」または「～であり」となって後文に続いていく場合について考える。

(54)　こちらは二の丸で，あちらが昔の御本丸でございます。(暗)
(55)　斬った方は竹さん以前からのおかみさんで，斬られたのも竹さんの友達で，一緒に山へ来たことのある人だそうです。(暗)
(56)　それはお茶屋さんという仕事でなくて，どこの商店とか，そういうお宅はみんなそうでしたか。(録)
(57)　一応，担当は二歳児で，去年も二歳児だったんです。(録)

「同一づけ」では，前文と後文が「～で」等で結ばれる場合，(54)～(57)のように2文が異主語で対照的な文になることが多い。前文で一つのことを説明し，後文でそれと対照的な別のことを説明する。ところが前文が「種類づけ」の場合，2文の関係は対照的であることは少ないようである。

(58)　八重さんというのは，やはり「小雪」の女中で，私の友だちです。
(59)　点お時さんはしっかり者で，自分のことはあまり言いたがらない性質でしたから，わりに仲のよかった私にも，ほんとうの生活はよくわかりません。(点)

(58)は八重について，「「小雪」の女中」であることと「私の友だち」であることを説明し，(59)も(58)と同じくお時さんについて並列的に説明している。(59)では「しっかり者で」が「ほんとうの生活がわからない」理由にもなっており，前文が「性質づけ」「状態づけ」の場合のように理由づけになっていくようである。(60)は「状態づけ」，(61)は「性質づけ」の文で，前文が後文の理由になっていると考えられる。

(60)　便りも一年に二回か三回ぐらいで，どんな暮し方をしているのかさっぱりわかりません。(点)

(61)　弟はまじめな性格で，女のことでかなり苦しんでいる様子だったとは，弟の視しい友人からこちらに発つ前に聞きました。(点)

3.3 「状態づけ」の機能

「状態づけ」は一時的な状態を問題にするため，会話ではかなりの程度に活躍する。

(62)　あれは思春期だからね，ママ，ぼやぼやしてっと困るよ。(女)

(63)　マコは春から2年だし，鈴子は来年から小学校だし，やっと子供に手がかからなくなって……(女)

(64)　グリューミオって人はアル中だってね。(録)

(65)　マァ，あの時は，去年はちょっとスランプだったというふうなことに……(録)

また，聞き手にものごとの状態を問う質問の形で出て来る場合が多い。

(66)　繁：子供たちは。
　　典子：うん，元気でやっているから助かるわ。(女)

(67)　明：入金はいつ。
　　典子：2，3日のうちに入りますよ。(女)

(68)　典子：池田ポリはどういう話でした。
　　大村：ああ，いやぁ実にいやな話でね。……(女)

(69)　繁：ご病人はいかがですか。
　　日野：いやどうも。あっ留守中はいろいろと……(女)

疑問の形は(66)のように主語だけのもの，(67)のように疑問詞止めのもの，(68)(69)のように全文あらわれるものがある。(70)～(72)のような主語のみの疑問文は「同一づけ」にもあるが，「同一づけ」の場合やや横柄な感じを与える。

(70)（お）国は。
(71)（お）名前は。
(72)（お）仕事は。

例えば(72)の場合，「状態づけ」として「仕事はうまくいっているか」の意味で用いられるときには失礼な感じはないが，「同一づけ」として「仕事は何か」を問う場合はやはり一方的な印象を与える。「同一づけ」による疑問文は情報求めのために用いられるため，主語止めという省略の形では失礼に聞こえるのであろう。一方，「状態づけ」はそのものについては話し手・聞き手の間ではすでに前提となっており，その上での状態伺いであるから，省略を使っても「同一づけ」よりは自然に感じられるのであろう。

4. おわりに

以上，名詞述語文の中で，「種類づけ」「同一づけ」「状態づけ」について伝達機能の面からながめてみた。断片的な考察でしかなかったが，名詞述語文の典型とされる「同一づけ」以外で名詞述語文がかなり活躍しているのがわかる。

文の中には，その文自らの中に伝達機能的な要素を備えているものと，文脈や談話の中に置かれて，初めて機能を持つものがある。動詞述語文の一部は前者に属し，名詞述語文の多くは後者に属すると考えられる。

(73)　その時にまた来てみます。<意志>
(74)　僕がやりましょうか。<申し出>
(75)　奈良に行こうと思うんですけど。<希望>
(76)　あとであなたからもよく聞いておいてくださいよ。<依頼>

動詞述語文は，(73)～(79)のように，述語に命令・依頼・希望などの形式を持つことができる。一方，名詞述語文はそれらの形式を持つことはできない。名詞述語文は一部，疑問文，否定文を除いて，基本的には1文レベルでは機能的に中立的で，文脈，談話の中に置かれて機能を持ち始めると言えよう。「(1)しょせんあたしは三流品よ。」という文がどのような話し手の表現意図と結び付いて発せられたかは，1文だけではわからない。しかし，(1)が内包を伝え

る「種類づけ」という意味的な関係を持つ限り，話し手の感情表現に使われやすいと言うことはできるであろう。

名詞述語文という，1文では話し手の表現意図を伝えにくい中立的な文が，会話の中で，話し手の意図伝達の機能を持つ文に変わっていく。そして，文としての意図伝達の機能的な違いは，それぞれの文の主語と述語の意味的な関係の違いから生じてくる。

今後も名詞述語文の意味的，機能的関係という大きな問題を，少しずつ見つめなおしていきたいと思う。先輩諸氏のご助言をお願いする次第である。

（注）

（1）参考文献③より引用
（2）本稿は参考文献に①にのっとって論を進める。
（3）例文に出典のないものの多くは参考文献①で使われているものである。
（4）高橋は，主語と主語の意味的な関係は文の構造の骨組をなし，文の構造のあり方は，主語と述語の意味的的タイプごとに整理されなければならないと述べている。例えば，「性質づけ」の文，「かれはサンドイッチマンだ」は，側面語で「かれは職業がサンドイッチマンだ」と拡大できるが，「同一づけ」の関係の場合「あれはサンドイッチマンだ」は拡大できない。高橋はまた，「主語と述語の意味的な関係は，文の内容的側面を受け持つことによって，文の形式的側面である陳述性とかかわってくる。例えば，性格づけや同一づけの文はテンスから解放されることができる」と言っている。
（5）（1）に同じ。

（参考文献）

① 高橋太郎「名詞述語文における主語と述語の意味的な関係」『日本語学』12月号，1984
② ――――「指示語の性格」『日本語学』3月号，1990
③ 寺村秀夫『日本語のシシタクスと意味Ⅰ』くろしお出版，1982
④ 西原鈴子「談話構造における助詞の機能」『日本語教育』62号，1987
⑤ 国立国語研究所『話しことばの文型(1)』秀英出版，1963
⑥ 池上嘉彦『意味論』大修館書店，1975

（出　　典）

『女が職場を去る日』国際交流基金ビデオ教材
『ちょっといい夫婦』　〃
『母上様』　〃
『3年たって，恋』　〃
「徹子の部屋」
「NHKラジオ子ども教育相談」

『伸子』宮本百合子　中央公論社
『暗夜行路』志賀直哉　中央公論社
『点と線』松本清張　新潮文庫
「録音機」『言語生活』筑摩書房